

# 「出雲方言と石見方言の境界域調査」のための 予備調査結果の分析とその方法の検討(1)

高橋 純<sup>1</sup> 山下 由紀恵<sup>2</sup>  
(<sup>1</sup>総合文化学科 <sup>2</sup>保育学科)

The Analysis of a Pilot Survey of the Borders between *Izumo*-and *Iwami*-Dialects in Shimane and  
the Investigation of the Survey Method. (1)

Jun TAKAHASHI, Yukie YAMASHITA

キーワード：石見方言，大田市，江津市，幼児，言語の獲得  
*Iwami*-dialect, Oda-city, Gotsu-city, infant, the acquisition of language

## 1. はじめに

本調査は、島根県内に存在する出雲方言と石見方言との境に位置する大田市を中心に調査をし、その言語的な特徴を析出することにある。しかし、この調査は、通常の方言調査として行われる話者の言語が形成された後の成人を対象とする方言調査ではなく、幼児を中心に行い、言語を獲得する段階でどのような方言を身につけていくのかを見ることが目的である。

本稿では、この研究の意義と調査方法、そして予備調査の結果を示しながら、本年度(2012年度)の10月より順次開始する本調査への展望を示すつもりである。

## 2. 研究の意義

### 1) 石見方言の記述

島根県内は、方言の分布を大きく分けると東側に出雲方言、西側に石見方言と呼ばれる方言が分布している。この分布は、ちょうど旧国制の境に由来し

ている。しかし、出雲方言は、方言学的に興味深い現象を持っており、多く研究・調査が行われているが、石見方言に関しては、他の中国方言と同様の特徴を有しているとの見方から、また大学など研究機関の不在などの理由が考えられるが、近年ほとんど行われていない状況である。

例えば、実際、CiNiiで「石見」「方言」で検索しても、3件がヒットするのみで、そのうち2件は、1960年代と1970年代の研究<sup>1)</sup>で、もう一件は、2012年の研究ではあるが、近世中頃のことばを対象としたものである。<sup>2)</sup>また、都染(2004)のように西日本の日本海側沿線を広く調査している研究でさえ関西から出雲地域までとなっている。さらに、工藤(2004)のような科学研究費を受けながら、かつ1996年から2002年まで行われた大規模な調査でさえも、石見地域の方言は抜けている状態である。そして、科学研究費では、1985年に田籠博氏が行った「島根県石見東部地域方言の調査研究」の1件となっているが、現在、閲覧できる形式にはなっていない。

このような状況の中で、石見方言を調査するということは、非常に意義のあることであり、方言学にも寄与できるものではないかと思われる。また、学術調査として、石見の方言を記述することは、島根県立という名を冠している本学としての地域貢献になるのではなだらうか。

## 2) 調査地としての大田市

本調査は、石見方言として大田市を中心に実施する。そして、この節では、大田市から調査を始めることの意義を検討する。大田市は、地理的に、出雲地域に接しており、石見方言内でも出雲方言に通じる特徴を持っていることが容易に想像できる。それならば、まず調査の最初としては、出雲地域から離れた土地でいわゆる石見方言らしさを持っている典型的な場所から、始めるべきではないかという意見もあるだろう。

しかし、方言において典型的とはどのようなものであろうか。これに関しては、答えはないように思われる。なぜならば、その基準となるものが方言にはなく、また人口の多寡によって決めるものでもない。その土地で話されていることばを方言とするのなら、その土地で話されていることばがその土地の典型的なことばであろう。つまり、本調査では、石見方言と括りを大きく設定しているが、まず大田市近郊のことばから調査を開始し、出雲のことばと接する地域から析出できる特徴を起点に石見方言全体へと広げられる基礎を築くことができると考えている。

つまり、今後の展開として、島根県の西の方向へと調査を広げていくための起点として、大田市から石見方言の調査をはじめ。そして、多くの調査・研究が行われている出雲方言と対比が行いやすいという点も大田市のことばからは始める利点として上げられるかと思われる。

## 3) 幼児を対象とすること

従来の言語調査、特に方言調査においては、母語としての言語が安定していない時期の年齢を対象に行うことは、されてきていない。<sup>3)</sup> これは、個人に

おいてその人のネイティブ言語になるとはどのようなことが明確に定義されていないからではなだらうか。

また、地方の都市化にともない失われていく伝統方言の記述を最優先に方言調査が進められてきたこともあり、お年寄りからの聞き取りが多く行われてきた。

しかし、1980年代はじめより井上史雄氏などの研究をきっかけに若者の新方言への関心も高くなり、盛んに研究が行われるようになった。

このような方言の変化へと目が向けられる中で、言語習得期の幼児の方言による言語行動を調査することは非常に意義深いことと思われる。

更に、この幼児を対象とすることの意義については、共同研究者の山下が担当する「出雲方言と石見方言の境界域調査」のための予備調査結果の分析とその方法の検討(2)」(本紀要内に掲載)に詳述されているので、参照されたい。

## 3. 従来の調査・研究と予備調査

調査方法の検討のために、ここでは、本調査を始める前に従来の調査・研究と本学内の学生に対して行った予備調査を概観し、次節の調査方法の橋渡しとしたい。

### 1) 従来の調査

大田市のことばは、石見方言に含まれるとされている。そこで参考として、島根県内の方言として、石見方言と出雲方言を比較すると、出雲方言の特徴はいわゆるズーゾー弁といわれる中舌母音の発音が特徴としてあげられる。そして、現在、老年層に残る程度で壮年・若者には、見られない。しかし、神部(1998)によれば、石見方言では、その中舌母音は元来見られない。そして、次のような指摘をおこなっている：

石見方言は、前二者(出雲・隠岐：括弧内は高橋)の方言とはかなり異質であって、広島・山口に連なる、いわば中国山陽色が強い。出雲方言に見られる、先述の特色音声や古語法も、

ここの主域には存しない。aiの連母音も、[ka:ta] (書いた) のように[a:]であるのが普通であり、かつての開音も、ここでは[bo:zu] (坊主) のように、[o:]となる。「買った」も「コート」、「借りた」も「カッタ」とあって、中国一般の状況に類する。

そして、神部 (1998) では、各地の石見方言の記述がなされ、特徴的なものに関して、項目ごとにその形式が記されている。しかし、石見方言を各地域に分けて体系的に記述してあるわけではない。また他の調査・研究でも、そのような例は、管見では、見受けられない。

そこで、今回の調査を行う前に、言語調査ではないが昔話の採話によって得られた音声資料をもとに、石見方言内の東部と西部の違いを概観した。

## 2) 昔話の採話資料

ここでは、採集された昔話をCDにまとめた田中 (1997) を参照し、石見方言の予備調査とした。

まず、田中 (1997) には、「隠岐の語り」・「出雲の語り」・「石見の語り」と採話されたものが整理されている。このCDは、島根大学教育学部国語研究室昔話研究会が1972年より島根県内各地の民話を現地録音し、文字化して報告する活動を続けてきたものから、比較的録音状態のよい語りを選んで一般向けに、地元の本屋を通して出版したものである。<sup>4)</sup> このCDには、冊子も添付されており、各語りにその語りを語った方の氏名と採話地域が記されている。

そこで、ここでは、石見地域を東部と西部に分けて、CD内のことばを概観する。このCDに含まれ、東部に分類される場所としては、大田市富山町・邑智郡大和村・邑智郡石見町 (大和村と岩美町は市町村合併後、現在は邑南町) の3つの語りが収録されている。そして、西部は、美濃郡匹見町 (現在は、益田市に編入) で採集された2つの語りである。以下の表1に、断定詞と理由を表す接続詞、アスペクトを表す形式に限り対比しておく。数え方としては、とにかく出てきた形式をすべて数える延べ語数

で表した。

表1. 昔話に現れる形式

	石見東部	石見西部
断定	だ(2)	じゃ (4)、だ(2)
理由	け(5)	け(8)、けん(1)、から(1)
進行相	とる(9)、よる(6)	よる(10)
結果相	とる(4)	とる(3)

この表1から見る限り、断定の形式とアスペクトに関して違いが見られる。断定の形式は、東部がダのみなのに対して、西部はジャとダの両形が用いられている。アスペクトでは、石見西部で、進行相は、ヨル系のみで、結果相との使い分けがされているが、東部では、ヨル系とトル系が進行相で混在しており、結果相はトル系のみが使用されている。

ちなみに、富山町 (東部) の方の語りの中には、出雲方言で今でも頻繁に用いられているゴスという形も「あんなこと言うてごすな」というように現れている。

## 3) 学生への予備調査

本学の学生は、6割以上が島根県出身ということで、本学学生の保育学科・総合文化学科の1・2年生を対象にネットを利用してアンケートを実施した。調査票の例は本報告の末に資料として挙げておく。アンケートは、学内の学科ごとのメーリングリストを使用し、学生にアンケートの協力をもとめ、アンケートが掲載されているWebページに誘導し、そこで回答してもらった。ページのイメージは、次ページの図1のとおりである。

実際にアンケートに答えてくれた学生は、142名で有効回答は141件であった。アンケート項目としては、その後の追跡調査を可能にするために、任意ではあるが学籍番号を記入してもらった。そして、出身地を特定するために出身地の郵便番号を記入してもらった。

調査内容としては、上記の昔話のCDや事前の学生への聞き取りにより、出雲方言とコントラストを

なすような文法項目と、近年の方言の文法研究で行われているものを質問項目としてあげた。以下のとおりである：

問1は、理由を表す接続助詞の形式を問う項目で、出雲方言では、「～だけん」という表現が行われているが、石見方言では、「～じゃけ」や「～だけ」のような形式が用いられているようなので、その分布を概観するために行ったものである。

問2は、アスペクト形式で、共通語のテイル形に相当するものにどのような形式を使用するかという項目である。ここでは、音韻的な特徴とヨル系とトル系の、両系列を使用するのか一方のみを使用するのかという、意味とは分離させた形態の使用を概観するための項目である。

問3は、出雲地方で頻繁に用いられるクレルに相当するゴスという形式を問うものである。この形式は、石見でも東部ではみられると神部(1998)でも記されており、また昔話のCDでも聞くことができた。そこで、この形式が石見のどの地点まで分布しているのかをみるものである。

問4は、アスペクト形式を意味と合わせて、どのような形式が用いられるかを見る項目である。狙いとしては、進行相の形式の分布が明示的になることを旨とした。

問5は、可能の否定形を見るための項目である。これは、五段動詞と同系列の可能動詞がある場合でも、可能動詞を用いなくて五段動詞の未然形に「れん」がついた例が聞かれることがある<sup>5)</sup>ので、調査項目に加えた。

アンケートでは、各言語形式の項目について「よく使う」「たまに使う」「あまり使わない」「全然使わない」の4つの選択肢で答えてもらった。そして、「よく使う」を3点、「たまに使う」を2点、「あまり使わない」を1点、「全然使わない」を0点として、平均点を求めた。調査数は少ないが、次ページの表2のような結果が得られた。ただし、地域によって、非常に少ない人数しか集められなかったので数字に偏りが出ていることも了承されたい。

(1) 学生へのインタビュー

予備調査のためのアンケートには、アンケート後、再度協力してもいいという学生には、学籍番号を記入してもらい、追跡ができるようにしておいた。その中で、美郷町出身の学生2名に話を聞いた。上記の昔話を聞いてもらったり、家族内での話の仕方について話を聞かせてもらった。

その結果、昔話においては、祖父母が大田市の富山に住んでいるという学生は、富山の語りについては、やはり祖父の話し方に通じるところがあるという印象を語り、邑智郡の昔話の語り方にはなじみを感じたようだった。しかし、匹見町の昔話の語りでは、「よその話し方」という印象を持ったようであった。もう一人の学生も、富山を抜かせば、同じ印象を持ったようであった。

図1. ネット上でのアンケート

	よく使う	たまに使う	あまり使わない	全然使わない	祖父母が使う
a.～だけん	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input type="checkbox"/>
b.～じゃけえ	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input type="checkbox"/>
c.～だけえ	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input type="checkbox"/>
d.～やけん	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input type="checkbox"/>
e.～だから	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input type="checkbox"/>

f.その他  
  
 祖父母が使う

備考:

表 2. 学生への予備調査結果

	鳥安 取来 西部	松江 ・ 出雲	石見 東部	石見 西部
問 1				
～だけん	2.7	2.4	2.6	0.5
～じゃけえ	0.1	0.2	0.4	2.3
～だけえ	0.6	0.8	2.9	1.0
～やけん	0.2	0.3	0.2	0
～だから	1.6	1.6	1.8	0.3
問 2				
～しちよる	1.0	1.3	0.9	0.5
～しちょう	0.9	1.5	0.9	0.5
～しよる	0.4	0.6	1.3	1.0
～しとる	2.6	2.6	3.0	3.0
～しとう	0.4	0.5	0.3	0
～してる	1.6	1.6	1.7	0.3
問 3				
～してごさいた／ ～してごした	0.9	1.6	0.7	0
～してくれた	2.3	2.2	2.8	1.3
問 4				
雨が降っちよるよ	0.8	1	0.6	0.5
雨が降っちょうよ	1.2	1.3	0.4	0
雨が降っとるよ	2.5	2.3	3.0	2.3
雨が降っとうよ	0.8	0.5	0.4	0
雨が降りよるよ	0.3	0.4	2.0	2.0
雨が降ってるよ	0.3	0.4	2.0	2.0
問 5				
はけれんわ	1.9	1.9	2.3	1.3
はかれんわ	0.7	0.8	2.2	0.5
かけんわ	2.5	2.6	2.9	2.8
はけないな	0.5	0.6	1.1	0

## 4) 調査地点の決定

以上の過程を経て、「出雲方言と石見方言の境界域」は、沿岸部では、大田市から江津市にかけてではないかと仮定し、調査地点を大田市の東側と大田市の中心地、大田市寄りの江津市内の3カ所と決めた。現在、調査地点として2カ所、「江津市立渡津保育所」と「大田市のサンチャイルド長久さわらび

園」にご協力をいただくことになっている。ちなみに、江津市立渡津保育所は、江津市内でも大田市の近くに位置しており、大田市のサンチャイルド長久さわらび園は、大田市の中心地に位置している。今年度内にもう一カ所、行う予定であるが、この2カ所の調査を精査し、3カ所目の調査場所を決定したいと考えている。

## 4. 調査方法

今回の調査では、江津市立渡津保育所と大田市のサンチャイルド長久さわらび園という民間の保育所に協力の了承をいただいた。そして、年長組の幼児たちを対象とさせていただく。

採集の方法としては、子どもたちを3～4人ほどのグループに分け、こちらが用意した絵を見せて、子どもたちに絵について自由に話してもらい、それを録音し、採集するという方法である。

こどもたちには、2種類の調査を試みる。一つ目が、1)「何してる絵？」と称し、田口・小川(1997)を使用し、そこに使用されている絵を見て、絵の中で何をしているところかを説明してもらう。子どもと直接会話し、発話を引き出すのは、共同研究者の山下が担当した。そして、一通り絵を見てもらって話してもらった後に、2)「おはなし作ろう」として、紙芝居内の物語の一部5枚の絵を使用して、お話を作ってもらって、発話を収録した。

## 1) 「何してる絵？」の調査

この調査では、田口・小川(1997)を使用して、こどもたちにその中にある絵は、何をしているところの絵なのかを説明してもらうというものである。

田口・小川(1997)は、幼児用の言語障害を確認するテストのための本である。この本のこどもに対して使用する箇所には、文字はなく絵のみで構成されている。その中で、我々が選択した絵は、3枚である。内容は、以下のとおりイ)～ハ)としてあけておく<sup>6)</sup>：

イ) 登場人物は女の子と男の子とその母親の3名。バス停にバスが停車しており、そのバスに向かって走る女の子、その後ろでは男の子

が転んでいる。たぶん、母親が人差し指でバスを指しているの、その指示で女の子はあわててバスに向かって走って、待っていてもらおうとしているシーンだろう。

- ロ) 幼稚園の園庭で園児が先生を囲んで手をつないで輪を作っているときに、頭・手・足に包帯を巻いた女の子が母親に連れられて幼稚園に到着。それを見たひとりの男の子が女の子に駆け寄ろうとしているシーン。
- ハ) この絵は、3つのパーツで構成されている。二人の男の子がボートに乗って魚釣りをしているシーンがひとつ。続いて、釣りをしている二人がボートから落ちてしまい、それに岸边にいる子供たちが気づく。そして、3つ目の絵で、岸边にいた子供たちが自分たちの遊具を利用しておぼれた二人を助けているシーンである。

ここでは、予備調査で調べた形式が現れるような絵を選ぶよう気を使った。基本的には、アスペクト形式が現れやすそうなもの、因果関係などがあり、理由の接続助詞が現れそうな絵を選択したつもりである。

## 2) 「おはなし作ろう」

この調査でも先の調査と同様の形式が採集されることを想定して材料を考え、紙芝居を利用して子どもたちにおはなしを作ってもらおう。紙芝居は、以下の2つを使用した。<sup>7)</sup>

- かこさとし (脚本)・北田卓史 (絵) 『チョコレートカステラだいじけん』童心社
- 松谷みよ子 (脚本)・長野ヒデ子 (絵) 『くわず女房』童心社

各紙芝居から5枚を選び、順番に並べて、子どもたちに、どのようなおはなしなのか聞かせてほしいとの質問をし、おはなしをしてもらうという調査である。

この調査では、場面が複数用意されて、各場面ごとに因果関係や時間の流れなどが意識されるため、

子どもたちの発話に理由を表す表現やアスペクト表現が、そして、子どもたちが知っている内容ではないので、さまざまなムードの形式が採集されるのではないかという予想に基づいて行う。

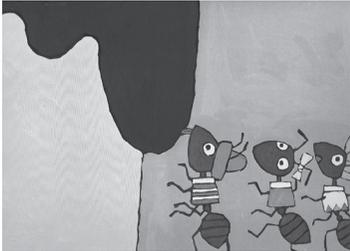
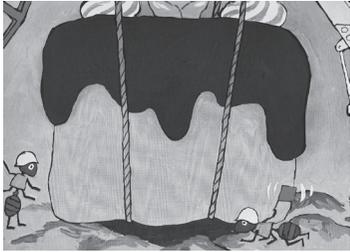
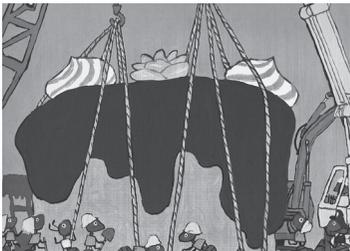
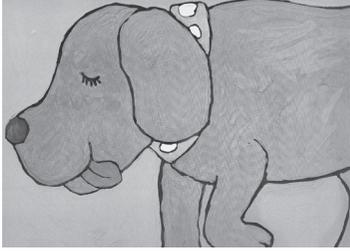
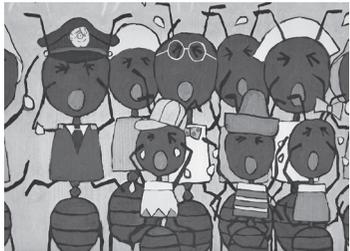
以下に調査で使用した紙芝居を表3として挙げておく。

## 5. まとめ

以上のような調査を行うことで、先に見た予備調査で浮かび上がってきた特徴を、幼児はどのような形式で表現しているのかを抽出し、地域性や現代の日本の地方に見られる共通性などから、石見の子どもたちがどのような言語を使用して生活をしているのかを解析していこうと考えている。

また、この研究を成功させるためにも、同時に石見方言の記述も進める必要があることが見えてきて、石見方言の従来型の研究の必要性も浮かび上がってきた。

表 3. 使用した紙芝居とその順序

順序	チョコレートカステラだいじけん	くわす女房
①		
②		
③		
④		
⑤		

## 【注】

- 1) 石田(1963)と塩谷(1970)
- 2) 彦坂(2012)
- 3) 江端(1984)に幼児の方言の獲得についての論考があるが、論文内には、明確に記されていないが、たぶんご自分のお子様を被験者として行っており、生活の場での採集ということになる。また、場所は広島県内で、言語調査においても量がそろっており、江端氏ご自身も方言研究の専門家でいらっしゃる。つまり、幼児の方言獲得の研究には、その背景に、従来型の方言の記述があって成り立つものであり、石見方言に関しては、この前提があまりにも少なすぎるのが難点である。
- 4) 田中(1997)のCDに添付された冊子の「まえがき」より。
- 5) 益田市匹見町で採集された談話より
- 6) 田口・小川(1997)は、言語障害を確定するためのテストであり、このような心理学的なテストは、一般に公開しないというのが通例であるようなので、ここでは、その絵は示さず、文章のみによって表した。
- 7) 本学には、絵本の図書室があり、この図書室の司書に、物語性があり、かつ絵がわかりやすい紙芝居を選んでもらった。そして、その候補からこの2点を選んだ。

## 【参考文献】

- 石田春昭(1963)「石見方言と古典語」『方言研究年報』5, pp.140-146.
- 井上史雄(2008)『社会方言学論考：新方言の基盤』明治書院
- 井上史雄・鎌水兼貴(2002)『辞典〈新しい日本語〉』東洋書林
- 江端義夫(1984)「幼児期における方言動詞アスペクト形成：2,3歳期双生児のばあい」『方言研究年報』26, pp.81-102.
- 神部宏泰(1998)「島根県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学8 中国・四国地方の方言(第2版)』国書刊行会, pp.211-238.
- 工藤真由美編(2004)『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系：標準語研究を超えて』ひつじ書房
- 塩谷崇司(1970)「石見地方西部方言における敬讓表現についての考察」『国語学論考(都留文科大学国文学会)』7, pp.37-44.
- 田籠博(1985)「島根県石見東部地域方言の調査研究」科学研究費症例研究(A)(研究課題番号：60710246)(未入手)
- 田口恒夫・小川口宏(1997)『新訂版 ことばのテストえほん：言語障害児の選別検査法』日本文科学社
- 田中瑩一監修(1997)『CDで楽しむふるさとの昔話：隠岐・出雲・石見』今井書店
- 都染直也(2004)「山陰地方における新しい方言形「～(ダ)ヘン」「～ガン」「～ダンカ」について：JR山陰線松江-和田山間グロットグラムをもとに」『甲南大学紀要. 文学編』138, pp.1-20.
- 友定賢治(2008)『島根県のことば』(日本のことばシリーズ32), 明治書院
- 彦坂佳宣(2012)「近世中頃の中国地方山間部における格助詞ノとガの用法：「石見方言茶話」「田植歌」の考察から」『論究日本文学(立命館大学日本文学会)』96, pp.1-17.

(受付 平成24年11月1日, 受理 平成24年12月3日)

## 【資料】

## 言語調査

学籍番号：

実家の郵便番号：

自分の家族内で話をしている場合を想像して選んでください。自分は使わないが、おじい様・おばあ様が使っている場合は、「祖父母が使う」にチェックを入れてください。選択肢以外で使用する形式がある場合は、それをお書きください。よろしくお願いいたします。

## 1. 理由を表す場合：

	よく使う	全然使わない	祖父母が使う
a. ～だけん	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
b. ～じゃけえ	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
c. ～だけえ	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
d. ～やけん	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
e. ～だから	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
d. その他 ( )			<input type="checkbox"/>

## 2. 「～くれる」の形式：

	よく使う	全然使わない	祖父母が使う
a. ～してごさいた／ごした	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
b. ～してくれた	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
c. その他 ( )			<input type="checkbox"/>

## 3. 雨が降っているところを見て、自分のお母さんに報告：

	よく使う	全然使わない	祖父母が使う
a. 雨が降りよるよ	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
b. 雨が降っとうよ／降っとるよ	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
c. 雨が降っちょうよ／降っちよるよ	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
d. 雨が降ってるよ	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
e. その他 ( )			<input type="checkbox"/>

## 4. ズボンを試着した際に、少しサイズが小さすぎた：

	よく使う	全然使わない	祖父母が使う
このズボン、	a. はけないな	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	b. はけれんわ	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	c. はかれんわ	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	d. はけんわ	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	e. その他 ( )		<input type="checkbox"/>

